



<論説>サー・ジョン・ヒックスと「古典派経済学」(今川正教授記念号)

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2009-08-25<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 白井, 孝昌<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.24729/00001671">https://doi.org/10.24729/00001671</a>                  |

# サー・ジョン・ヒックスと「古典派経済学」

白井孝昌

## I

本稿の直接の課題はサー・ジョン・ヒックスの近著『動学的経済学の方法』(1985年刊)の第4章「素朴な成長モデル——アダム・スミスとリカード」<sup>(1)</sup>に盛られている見解を紹介し、そこで彼が描いて見せるスミスおよびリカードの理論モデルと彼らの諸作品の中の陳述との間に重大な隔たりがあることを指摘することにある。その結果として、ヒックスがモデルを作成するさいに不可欠の構成要素として援用するいくつかの基本的概念、とりわけ生産関数の概念、が現代の経済学に固有の特殊な概念であって、それらを古典派経済学の理論の中に不用意に持ち込むときには、その理論の本質的要素を骨抜きにする怖れのあることが示唆されるであろう。

ヒックスのこの書物は、それよりも20年前に公刊された彼の著書『資本と成長』の第I部「動学的経済学の方法」<sup>(2)</sup>を大幅に書き直して一巻の書物として独立させたものである。その間に彼が行なった古典派経済学研究が彼にこの改訂を思い立たせた動機の一つであるとは、彼自身の述べるところである。その成果は、この書物の第4章としてまとめられる以前に、すでに次に挙げる5編の論文ないし覚書として公表されていた。すなわち、

---

(1) Chapter 4: Primitive Growth Models—Adam Smith and Ricardo, in Sir John Hicks's *Methods of Dynamic Economics* (Oxford: Clarendon Press, 1985), pp. 29–43.

(2) Part I: Methods of Dynamic Economics, in Hicks's *Capital and Growth* (Oxford: Clarendon Press, 1965), pp. 3–127.

(3) 'Ricardo's Theory of Distribution', in Preston and Corry (eds.), *Essays in Honour of Lord Robbins* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1972), and reprinted in Hicks's *Classics and Moderns: Collected Essays on Economic Theory*, Vol. III (Oxford: Basil Blackwell, 1983), pp. 32–38.

第1に、『ロビンズ卿記念論文集』（1972年刊）に寄せられた「リカードの分配理論」<sup>(3)</sup>、

第2に、1974年秋、ギリシャで催された方法論にかんするコンファレンスに参加したさいに刺戟を受けて書き始められ、後にそのコンファレンスの報告書の一つ『経済学における方法と評価』（1976年刊）に収載されることになった「経済学における革命」<sup>(4)</sup>、

第3に、1977年にハーバード大学紀要『季刊経済学雑誌』に寄稿した、サミュエル・ホランダーとの共著論文「リカード氏と現代経済学」<sup>(5)</sup>、

第4に、1979年の『オクスフォード経済論叢』に寄せられた「リカード体系：コメント」<sup>(6)</sup>、

そうして、最後に、1983年に刊行された彼の『経済理論にかんする論文集』第Ⅲ巻としての『古典派経済学と現代経済学』の第Ⅰ部「古典派および後期古典派経済学」を編むにあたって新しく書き下された論文「古典派モデルの社会会計」<sup>(7)</sup>である。

この最後の論文集の第Ⅰ部の前半部分、すなわち、ヒックスのいわゆる「古典派経済学」(the 'Classics')を扱う部分に収められている既発表の諸論文が、すべて1970年代の作品であることは注目すべき事実であろう。しかし、そのことはヒックスの古典派経済学研究がこの時期になって初めて行なわれたことを意味するものではけっしてなく、彼が経済理論の研究を開始した1930年代の初頭に、すでに基本的な視点が形成されていたと推定される証拠が残っていることに、われわれは注意したい。

(4) “‘Revolutions’ in Economics’, in Latsis (ed.), *Method and Appraisal in Economics* (Cambridge: Cambridge University Press, 1976), and reprinted in Hicks’s *Classics and Moderns*, pp. 3-16.

(5) ‘Mr Ricardo and the Moderns’ (with Samuel Hollander), *Quarterly Journal of Economics*, Vol. XCI, No. 3 (August, 1977), pp. 351-369, and reprinted in Hicks’s *Classics and Moderns*, pp. 39-59.

(6) ‘The Ricardian System: A Comment’, *Oxford Economic Papers*, New Series, Vol. 31, No. 1 (March, 1979), pp. 133-134.

(7) 2 ‘The Social Accounting of Classical Models’, Part I: Classics and Post-Classics, Hicks’s *Classics and Moderns*, pp. 17-31.

このことを指摘するに先立って、ヒックスの自伝的ないし回想的覚書ともい  
うべき2編の作品の存在に読者の注意をうながしておこう。その一つは、1979  
年にイタリアの『ラボロ国立銀行季刊評論』に収載された論稿「一経済学者の  
形成<sup>(8)</sup>」であり、そうして、いま一つは、1982年に刊行された彼の『経済理論に  
かんする論文集』の第Ⅱ巻『貨幣、利子および賃金』所収の「ロンドン・スク  
ール・オヴ・エコノミックスとロビンス・サークル<sup>(9)</sup>」というそれまで未公表の  
論稿である。後者は、その『論文集』の中で、ケインズの『一般理論』の出現  
以前の時期に書かれた論文をまとめてある第Ⅰ部「予兆」のための序章として  
新たに書き下されたもので、そこにはその時期のロンドン・スクールにおける  
研究動向の一面が鮮明に描き出されている。これらの作品に盛られている内  
容を本稿の読者の持つべき予備知識として前提することは紙幅の制約上やむを  
えないところではあるけれども、とりあえず、次の事情だけは述べておくこと  
にしよう。

オクスフォード大学のアンダーグラデュエートの課程の前半で数学を専攻し  
たヒックスは、その当時新設された「哲学、政治学、および経済学」のコース  
に転じた。その後、ポストグラデュエートの課程で「建設業と機械工業におけ  
る賃金格差」にかんする実証的研究を行なった後、彼は1926年にロンドンスク  
ール・オヴ・エコノミックス（以下、LSEと略記する）の教職に就くのであ  
る。その頃、LSEはそれまで永く続いていたエドウィン・キャナンの時代か  
ら、その後それ以上に永く続くことになるライオネル・ロビンスの時代に移る  
過渡期にあった。当時、LSEの経済学部門の部長代理を務めていたヒュー・  
ドールトン<sup>(10)</sup>はイタリアの学界の動向に通じていて、ヒックスの興味をパレートの  
理論に向けさせるうえで重要な役割を演じたが、間もなく彼は政界に転進し  
たのである。その跡を襲ったのは、すぐれた理論家として知られるアリン・ヤ  
ング<sup>(11)</sup>であって、彼はニコラス・カルドアには大きな影響を与えたようであるけ

---

(8) 'The Formation of an Economist', in *Banca Nazionale del Lavoro Quarterly Review*, (1979), reprinted in Hicks's *Classics and Moderns*, pp. 355-364.

(9) 1. 'Introductory: LSE and the Robbins Circle' in Part I: Premonitions, Hicks's *Money, Interest and Wages: Collected Essays on Economic Theory*, Vol. II (Oxford: Basil Blackwell, 1982), pp. 3-10.

れども、ヒックスとはあまり接触がなかったようである。彼は当時のヒックスを労働市場にかんする「写実的研究者」(a descriptive economist)<sup>(10)</sup> としか看做してはいなかったであろうとは、ヒックス自身の述懐するところである。ヤングは1929年の初めに突然亡くなって、ライオネル・ロビンズが教授兼部長として LSE に戻って来ることになる。彼の周囲には若くて有能な研究者たちが集まって、ヒックスのいわゆる「ロビンズ・サークル」(the Robbins circle)<sup>(11)</sup> が形成される。その中には、ヒックス自身の他に、ハイエク、アレン、セイヤー、カルドア、ラーナー、マリアン・パウリー、および、後のヒックス夫人、アーシュラ・ウェップ等の名が見られる。ヒックスが1929年以後に LSE で行なった研究のほとんどすべてが、「ロビンズ・サークル」の集団的研究活動の一部に属するものであったと彼は回想している。

本稿の課題とのかかわりでは、ヒックスが次のように述べていることが興味を惹く。すなわち、

「ロビンズ自身がキャナンの弟子であって、彼が目標として設定した計画の一つにキャナン主義の復興 (a restration of Cannanism)<sup>(12)</sup> があった」

というわけである。キャナンは、言うまでもなく、アダム・スミスの『国富論』の、いわゆるキャナン版を編むことによって、今世紀における『国富論』の読者に、良きにつけ悪きにつけ、多大の影響を及ぼした人である。彼は、また、1890年代以降の限界生産力説が広く受容されるに至った新しい時代の理論的見地に立って、古典派経済学における生産と分配の理論を再検討した学説史の権威者でもあった。

われわれは、ここで、LSE の紀要『エコノミカ』の1933年2月号に収載されている2編の論稿に注目したい。その一つは、ヴィクター・エデルバーグの論文「リカードの利潤の理論」<sup>(13)</sup> である。エデルバーグは、資本主義的生産の基本的特徴を生産期間における資本の時間的構造に見る立場と、そうして、限界

(10) *Ibid.*, p. 4n.

(11) *Ibid.* and *Classics and Moderns*, p. 357.

(12) Hicks, *Money, Interest and Wages*, p. 4.

(13) Victor Edelberg, 'The Ricardian Theory of Profits', *Economica*, No. 39 (February, 1933), pp. 51-74.

生産力説の立場から、リカードの利潤の理論を再構成しようとするのである。いま一つは、<sup>(14)</sup>タウシッグの著書『賃金と資本』に対するヒックスの書評である。タウシッグのこの書物は1896年に刊行されたが、早くから絶版になっていたので、1932年にLSEの経済学稀覯文献覆刻シリーズの一つとして覆刻された。その副題は「賃金基金学説の検討」となっているように、それは新しい分配理論としての限界生産力説の勃興を見た1890年代の動向を背景にしながら、古典派を貫く賃金基金説の系譜を理論的に検討するものであったから、賃金問題から出発して一般的な経済理論の研究を志向していた当時のヒックスにとっては、書評の対象として絶好の書物であったにちがいない。エデルバーグの論文も、またヒックスの書評も、ともに、オーストリアからハイエクを迎え入れた直後の「ロビンズ・サークル」の主要な関心の所在を鮮明に打ち出している。こういうわけで、ヒックスは1930年代の初めに、すでに古典派の分配理論の検討に手を染めていただけではなく、生産関数を用いてリカードの利潤の理論を再構成しようとするエデルバーグの試みに触れていたであろうことにも疑いの余地はほとんどありえないと考えられる。

## II

ヒックスの『動学的経済学の方法』は現代を代表する経済理論家が到達した「方法」の観念を明示するものとしてきわめて興味ある著書である。彼はその第I章「方法、動学、および静学」の劈頭で次のように述べている。

「……一つの方法 (a method) とはモデルの族、あるいは類 (a family, or class of models) である。モデルとは一個の理論 (a piece of theory), すなわち、一つの理論的構造 (a theoretical construction) であり、それは一定の範囲の事実に適用することが意図されている。」<sup>(15)</sup>

それゆえ、ヒックスの立場から「古典派経済学」の、つまりはアダム・スミスとリカードの経済学の「方法」を論じるためには、まず、彼らが散文体で述

(14) J. R. Hicks, 'Wages and Capital. (An Examination of the Wages Fund Doctrine.) By F. W. TAUSSIG. L. S. E. Reprints No. 13. (1896) 1932. pp. 352. 7s.', *Economica*, No. 39 (February, 1933), pp. 101-104.

(15) Hicks, *Methods of Dynamic Economics*, p. 1.

べている論理をモデルの形に再構成する作業が行なわれなくてはならないのである。そうして、その作業が適正に行なわれたとするならば、その結果として提示されるいくつかのモデルを何らかの共通の特性に照らして分類する作業はほとんど機械的とも言えるような単純な仕事になることであろう。

ヒックスの言葉で明示的に述べられているわけではないけれども、その著書の全体的な論述のありようから、彼のいう「モデル」とは、事実上、数式を用いて表現することのできる論理構造、すなわち、数学的モデルを指すものと受け取ってよいであろう。じっさい、数学的モデルに構成することの困難な部分を、彼はしばしば「ほとんどありのままの描写」(almost bare description)、あるいは、「写實的陳述」(realistic remarks)<sup>(16)</sup>として捨て去るのである。

しかしながら、スミスやリカードが単純な数値例を提示して、容易にモデル化することのできる議論をするとき、それはしばしば、彼らの理論の十全な構造を示すためではなく、むしろ一種のレトリックに訴えて、きわめて間接的にその理論の一局面に光を当てようとしているものと受け取られるのである。彼らの提示する数値例がそのような性格のものであるとするならば、その数値例から直接的に誘導される数学的モデルを彼らの理論の実体とすることには議論の余地があるであろう。

以上の説明はやや抽象的に過ぎるようと思われるので、具体的に論じてみたい。スミスの『国富論』の、たとえば、第I編の第VI章「商品の価格の構成部分について」と、第VIII章「労働の賃金について」の、いずれも冒頭の部分に、いわゆる「投下労働価値説」の陳述が見出されることは周知の通りである。<sup>(17)</sup>そこに述べられている「一個の理論」をモデルとして表現することはきわめて容易である。<sup>(18)</sup>スミスは、まず、「ストックの蓄積と土地の占有の双方に先立つ初

(16) *Ibid.*, p. 29.

(17) Book I, Chapter VI: Of the Component Parts of the Price of Commodities; and Chapter VIII: Of the Wages of Labour, in Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited by Edwin Cannan (London: Methuen, 1904), Vol. I, pp. 49-56, and pp. 66-88.

(18) 以下の説明の詳細については、拙稿「賃金基金説の系譜について (10), および (11)」, 『経済学研究』(北海道大学)第37巻第1号, pp. 130-137, および, 第2号, pp. 170 (308)—177 (315) を参照せよ。

期未開状態の社会」(that early and rude state of society which precedes both the accumulation of stock and the appropriation of land)<sup>(19)</sup>として「狩猟者たちの国」(a nation of hunters)<sup>(20)</sup>を想定したうえで、そのような状態のもとでは、「異なる対象物を取得するのに必要な労働の諸量間の釣り合いが、それらの物を相互に交換するさいに何らかのルールを与えることのできる唯一の事情である」<sup>(21)</sup>ことを単純な数値例を用いて説明するのであるが、その議論の骨格は次のようにしてモデル化されるであろう。そのような社会では分業 (the division of labour, and the separation of trades) が未発達であることの結果として、狩猟者たちの体力や技能に有意の差が存在しないと考えるよいことは、これらの章に先立つ第 I 編第 II 章「労働の分割を引き起こす原理について」<sup>(22)</sup>の議論から容易に了解できるであろう。そこで、彼らにとっては、1時間の労働によって  $d$  頭の鹿が獲れるのが通常であるとする社会的通念が成立しているものとしよう。同様に、彼らが1時間の労働を投入すれば  $b$  匹のビーバーを獲ることができると想定しよう。もちろん、原野で鹿を狩るのと、川の水の中にビーバーのわなを仕掛けるのとでは、労働にともなう苦痛の度合がまったく異なるので、これらの異質な労働を同じ尺度で測ることのできる社会的事情を想定しないかぎり労働価値説は成立しない。そこで次のように想定してみよう。すなわち、狩猟者たちはどちらの労働も十分に経験していて、たとえば、鹿を狩る労働を標準労働とすると、ビーバー猟の1時間労働は  $t$  時間の標準労働に相当するという社会的通念が成立しているものとする。いま、鹿の頭数を価値尺度にして表示されるビーバーの実質価格を記号  $p$  で表わすと、スミスは

$$p = \frac{d}{bt}$$

が成立することになろうと論じているのである。彼の数値例では、 $p=2$ 、す

(19) Smith, *op. cit.*, p. 49.

(20) *Ibid.*

(21) *Ibid.*

(22) Chapter II : Of the Principle which gives Occasion to the Division of Labour, *ibid.*, pp. 15-18.



なわち、1匹のビーバーに対して2頭の鹿が交換されることになっているが、その数値を上式から得るために、右辺を構成する三つの変数  $d$ 、 $b$ 、および  $t$  の値の組み合わせ方はさまざまありうる。たとえば、 $d=b=1$ 、および、 $t=\frac{1}{2}$  とするのは一つの例である。すなわち、鹿を1頭獲るのにも、また、ビーバーを1匹獲るのにも、1時間の労働がそれぞれ必要とされるが、しかし、鹿を狩る労働にともなう苦痛度は、ビーバーのわなを仕掛ける労働のその半分ではないと想定することによっても、スミスの数値例を作ることができる。

スミスは、上式によって表現される理論を用いて、《商業的社会》における「商品の価格の構成部分」が賃金、利潤、および地代の基本的所得範疇に分離することが《商業的社会》に特有の事象であることを強調しようとしているのである。もちろん、直接的には、「ストックの蓄積と土地の占有の双方に先立つ初期未開状態の社会」では、そのような所得範疇の分離が生じないことを論証しているのであるけれども、彼のほんとうのねらいが《商業的社会》の特質に光を当てることにあることは彼の議論の全体的な文脈に照らして明らかであろう。この意味において、スミスの「投下労働価値説」は一種のレトリックであるから、それをもって《商業的社会》にかんする価値の理論の一局面と看做すのは牽強附会というものである。

くりかえし強調するならば、スミスが『国富論』において解明しようと意図している窮極的対象は、彼の時代の大ブリテンの社会の中に最も鮮明に写し出されていた経済的自然状態である。彼はそれについて一つのヴィジョンを抱いていたのである。『国富論』の課題はそのヴィジョンに言語的表現を与えることにあったと言ってもよいであろう。そこで彼のヴィジョンと結びつく社会像に名称をつけておくと何かと便利であるので、われわれは『国富論』第I編第IV章「貨幣の起源と使用について」<sup>(23)</sup>の冒頭のパラグラフにおいてほとんど一回限りで使用されている「商業的社会」(a commercial society)<sup>(24)</sup>という言葉をその名称に転用してみたのである。こうして、スミスの課題は《商業的社会》の解明にあると言うことができよう。『国富論』をそのような作品として捉える

(23) Chapter IV: Of the Origin and the Use of Money, *ibid.*, pp. 24-31.

(24) *Ibid.*, p. 24.

とき、その中に《商業的社会》とはまったく事情を異にする「初期未開状態」の議論が見られるとしても、そのことはスミスが歴史上実在した未開社会に関心を抱いていたということの意味するものではけっしてないことが明らかになるであろう。スミスの言う「狩猟者たちの国」の獲物の一つがビーバーになっていることは、直ちに、彼の念頭に北アメリカのインディアンの社会があったであろうことを示唆するけれども、そのことはスミスが今日の「文化人類学」のような学問体系を志向していたという証拠にはならないのである。むしろ、彼の「初期未開状態の社会」の概念は、《商業的社会》の説明を鮮明にするための補助手段として工夫された架空の概念であって、何らかの实在物を指示するものではないと言うべきであろう。

さて、ヒックスはスミスとリカードの作品の中に表現されている理論を彼のいわゆる「素朴な成長モデル」として再構成するにあたって、この種のレトリックの部分と、本来的な理論の部分との評価を正当に行なっているであろうか。このような問題意識を念頭に置いて、彼の作成するモデルを眺めることにしよう。

### III

ヒックスの『動学的経済学の方法』の第4章「素朴な成長モデル——アダム・スミスとリカード」は合計50個の Paragraph から成るが、彼はそれらの Paragraph を八つのグループに分けることを横線を入れて指示しているので、われわれはそれらのグループを節と見立てて、§1 から §8 とし、それぞれの節に見出しを付して、この章の内容目次の形で議論の概要を示すことにしたい。それらの Paragraph には(1)から(50)までの通し番号を付して、グループの構成を指示するであろう。

#### 第4章「素朴な成長モデル——アダム・スミスとリカード」の内容目次

§1. スミスの『国富論』第Ⅱ編第Ⅲ章「資本の蓄積について、あるいは、生産的および不生産的労働について」をその書物の中心的な章と看做し、そこから「スミスの原モデル」(Smith's Original Model)を抽出すること。

- パラグラフ (1) から (7) まで。pp. 29-30.
- §2. 「スミスの原モデル」の構造の提示。パラグラフ (8) から (10) まで。pp. 30-31.
- §3. 「スミスの原モデル」に伴う二つの難点。その一つは、資本と生産物の同質性が仮定されなくてはならない点であり、いま一つは、「農業年」を単位期間と仮定する点にある。パラグラフ (11) から (19) まで。pp. 31-34.
- §4. スミスの理論における収穫逓増の役割について。パラグラフ (20) から (26) まで。pp. 34-35.
- §5. リカードの『エッセイ』型モデルの作成。パラグラフ (27) から (34) まで。pp. 35-38.
- §6. 『エッセイ』型モデルにおける単純化のための仮定を除去して、『原理』型モデルを構築すること。パラグラフ (35) から (43) まで。pp. 38-41.
- §7. 単純な『原理』型モデルの問題点について。パラグラフ (44) から (46) まで。pp. 41-42.
- §8. リカード以後、資本の理論は静学的性格を強めること。パラグラフ (47) から (50) まで。pp. 42-43.

この内容目次は、以下でわれわれが引用するヒックスのパラグラフの位置を示す目的で作られたものであって、ヒックスの論述の内容の要約を示すことはねらっていない。彼の論述の組み立ては、この程度の見出しで適切な要約ができるほどに単純ではないからである。以下、順を追って、彼の議論を紹介するであろう。

#### IV

ヒックスは「スミスの原モデル」を構築するに先立って、次のように述べている。

(1) 「私がここでアダム・スミスについて述べなくてはならないことの大部分は、彼の著書の中の「資本の蓄積について、あるいは、生産的および不生

産的労働について<sup>(25)</sup>」と題される一つの章にかかる事柄である。この章はスミスがその著書全体の中心的な章と看做されるべきことを意図したところのものであることに疑いの余地はほとんどありえない。それに先立つ諸章はその章のための布石であり、そうして、それに続く諸章はその章の応用である。そうして、その章の中に述べられてある原理——すなわち、《資本の増加の直接的原因は節儉であって、勤労ではない》、また《浪費家はすべて社会の敵、儉約家はすべて貢献者である》という原理——は、彼の時代からわれわれの時代に至るまで、「古典派」学説を（完全にとまでではないにしても）ほとんど完全に識別するためのしるしとなってきたのである。<sup>(26)</sup>

(2) 「このような容易に記憶される警句の中に結晶しているとはいうものの、そこでスミスが何を言おうとしているかをはっきりさせるのは、じっさい、それほど容易なことではない。そこには、現代の読者を悩ませる二つの困難がある。その一つは、その当時、経済学の諸分野の、あるいは、経済学の議論の種類、区分がなお未発達の状態にあったという事実である。（やがて示すであろうように）彼は、じっさい、きわめて単純な理論モデルに基づいて議論を進めているのであるけれども、そのような議論と、ほとんどありのままの描写 (almost bare description) との間に何ら懸隔が存在しないかのように、彼の陳述は進められるのである。本章の議論を行なうにあたって、私はこれらの写実的陳述 (these realistic remarks) を切り捨て、もっぱら、その純粹モデル (the pure model) に注目するであろう。<sup>(27)</sup>」

『国富論』の中で《商業的社会》の特性の一つを成すものとされる社会の「進歩的状态」(the progressive state)<sup>(28)</sup>についてスミスの述べる所を、ヒックスの「モデル」で表現し直そうと試みるとき、その根拠の大部分を、その著書の第Ⅱ編第Ⅲ章「資本の蓄積について、あるいは、生産的および不生産的労

(25) Book II : Of the Nature, Accumulation, and Employment of Stock, Chapter III : Of the Accumulation of Capital, or of productive and unproductive Labour, *ibid.*, pp. 313-331.

(26) Hicks, *Methods of Dynamic Economics*, p. 29.

(27) *Ibid.*

(28) Smith, *op. cit.*, p. 83.

働について」の記述に依拠することには疑問の余地がある。スミスの抱いていた「進歩的状态」にある《商業的社会》のヴィジョンが、『国富論』の中のどれか一つの特定の章の中にはほぼ十全な形で表現できるほど単純なものであったとは考え難いからである。もしもそれほどに単純なものであったとするならば、彼はそれを長年にわたる苦心の末に大冊の書物として表現するの必要を感じることがなかったであろうし、また、したがって、別個の小冊子を何冊か書き続けるといふ、もっと容易な道をとることができたであろう。じっさい、『国富論』の全体で表現されている進歩的な《商業社会》はさまざまな特徴的の局面を持っているのである。そうして、その第Ⅱ編第Ⅲ章に述べられているものが基本的な局面を成すことは否定できないけれども、それがまた、いくつかの本質的の局面の一つでしかないことも重要な事実なのである。それゆえ、ヒックスの述べるような方針に従うならば、そうして構築される「モデル」が表現するものは不当に矮小化された何ものかとなって、スミスのヴィジョンからはほど遠いものが得られる見込みが大きいと思われるのである。

さて、ヒックスは続けてこう述べる。

(3) 「第2に、その純粹モデルは一貫して、資本の唯一の形態（問題とされる唯一の形態）が流動資本（*circulating capital*）であるという仮定に立って論じられる。このような仮定は、すくなくとも、経済学のアングロ・アメリカ的な伝統（*the Anglo-American tradition*）の中で育ってきた者にとって、今日きわめてなじみのないものであるから、その結果として、まったく秘教的に思われるのである。しかしながら、彼は彼の方式で、ちょうどわれわれ<sup>(29)</sup>がわれわれの慣れた方式でしていることと同じことをするのである。」

(4) 「われわれは固定資本（*fixed capital*）に焦当を当てている。こうして、われわれは粗投資を純投資（すなわち、全資本ストックの増加分）プラス既存の固定資本の減損部分の補填に等しいと定義する。スミスの（公式的）モデル〔*Smith's (formal) model*〕の中には固定資本は存在しない。しかし、彼は粗投資に対応するものを持っている。それを彼の用語で言うと次のようになろう。すなわち、純投資プラス流動資本の減損部分の補填がそれであり、こ

(29) Hicks, *op. cit.*, p. 29.

のような「粗投資」の生産にかかわる労働を彼は「生産的労働」(‘productive labour’) と呼ぶのである。<sup>(30)</sup>

パラグラフ (3) における「アングロ・アメリカ的な伝統」というヒックスの言葉は奇怪である。血統の問題としてはともかく、経済学の伝統について、「アングロ」という形容詞からスミスとリカードを排除するとき何が残りというのであろうか。ヒックスの LSE における経験に照らすとき、その言葉は「オーストロ・アメリカ的な伝統」(the Austro-American tradition) でなくてはならない。彼がオーストリアから来たハイエクと、そうして、シカゴのフランク・ナイトの強い影響のもとで経済理論の研究者として育ったことは、彼自身の述べるところであるからである。それにしても、スミスが『国富論』第Ⅱ編第Ⅰ章「ストックの分割について」<sup>(31)</sup>において、流動資本と固定資本を明確に定義し、両者の割合が、商業、手工業、大規模工業、および農業など、さまざまな業種で異なる事情を説明していることは、周知の事柄に属するであろう。それらの陳述を、ヒックスは「ほとんどありのままの描写」として切り捨ててよいと考えるのであろうか。

ちなみに、スミスが進歩的な《商業的社会》の最も典型的な事例と考えた大ブリテンは、北アメリカと西インド諸島の植民地と緊密に結びついているものであった。彼は、それらの地域における賃金と利潤の動向を、第Ⅰ編第Ⅷ章「労働の賃金について」と第Ⅸ章「ストックの利潤について」<sup>(32)</sup>の中で詳細に分析している。この方面の植民地貿易における商業利潤が非常に高いのは、たんに航海条例による独占の効果としてだけでなく、これらの植民地に特有の有利な土地事情がその地の農業利潤と賃金を異例の高さに保つという背景あつてのことであることが、興味深い論理によって説明されているのである。大ブリテンの製造業と商業と、そうして、その植民地の農業との緊密な結合の中で成り立つ「進歩的状态」にかかわるスミスのビジョンの本質的部分が、固定資本を無視したモデルによって表現できるとする主張は、十分な裏付けなしには、とうてい受け容れることができないように思われるのである。

(30) *Ibid.*, pp. 29-30.

(31) Book II, Chapter I: Of the Division of Stock, Smith, *op. cit.*, pp. 261-268.

(32) Book I, Chapter IX: Of the Profits of Stock, *ibid.*, pp. 89-100.

ヒックスは、さらに、こう続ける。

(5) 「こうして、われわれの体系の中で粗投資の演じる役割を、彼の体系の中では生産的労働が演じるのである。われわれの消費〔財生産〕部門 (our consumption sector) に対応するものは、不生産的労働である（もちろん、その範囲ははるかに狭いものではあるけれども）。それが不生産的と呼ばれる理由は、その労働が（流動）資本の補填と、新規生産において何の役割も演じないからである。それがする仕事からは何物も残らない。それは、彼の言うように「その実行のまさにその瞬間に消滅する」<sup>(33)</sup> のである。<sup>(34)</sup>」

(6) 「そうして、これらがスミスの2部門になる。しかし、彼のものが最初の2部門モデルではないということを認識するとき、人はスミスのすることをもっと容易に理解できるであろう。それには、カンティヨンと重農主義者たちのモデルという先例があったのである。確かに、スミスはそのことを知っていたにちがいない。彼らが認めていた唯一の生産的労働は農業労働であったと言うなら、彼らのモデルはスミスの言葉で表現できたことになるであろう。その他の相異点のいくつかは、非常に重要である。しかし、それにもかかわらず、スミスを理解するためには、その先例にならって部門分割されたモデルから出発し、その次に、製造業、建設業、および、その他における生産的労働の諸形態を導入するという順序に従って、モデルを一般化する（しようとする）のが便利である。<sup>(35)</sup>」

(7) 「このようなモデル——それを私はスミスの原モデル (Smith's Original Model) と呼ぶことにするが——が存在すること、そうして、スミスの背後にそれが横たわっているのを探知することができることを私は信じる。そうして、リカードの背後にもまた、それが存在することを、われわれは示すことができるので、この信念はいっそう強化されるのである。<sup>(36)</sup>」

パラグラフ (5) と (6) でヒックスが述べるようなやり方で、スミスの生産的労働と不生産的労働の2部門を、現代の2部門成長モデルにおける投資財

(33) *Ibid.*, p. 314. ヒックスの引用はスミスの原文通りではない。

(34) Hicks, *op. cit.*, p. 30.

(35) *Ibid.*

(36) *Ibid.*

生産部門と消費財生産部門に対応させるのは乱暴きわまる操作である。農業労働は、スミスの場合にも重要な生産的労働であり、その生産物である穀物は賃金基金の実質的要素として流動資本を構成するけれども、その年間生産量の大部分は消費財であって、現代の成長理論における投資財ではない。もちろん、われわれは農業部門が消費財生産部門でなくてはならないと言うのではない。そうではなくて、スミスのヴィジョンをモデル化しようと試みる時、現代の理論に固有の概念を安易に押しつけることは許されないということを示唆したいのである。

パラグラフ(7)の陳述について注意すべき点は、そこに言う「スミスの原モデル」は「スミス自身のモデル」(Smith's own model)<sup>(37)</sup>ではないということである。以下で、ヒックスが「原モデル」(the Original Model)と言うとき、それはスミスのみならず、リカードの背後にも共通に存在すると彼が主張するモデルを指すからである。

そこで、その「原モデル」を見ることにしよう。ヒックスは、このモデルの単位期間が「農業年」(the agricultural year)であることを強調する。それは、1930年代の初葉に彼が受けた「オーストロ・アメリカンの伝統」の影響が今日まで生きていることの一つの顕れである。その期首の資本ストックを記号  $K_t$  とすると、それは前年の穀物の収穫量  $X_{t-1}$  に、不生産的労働部門への「漏れ」(a leak) の係数  $k$  を乗じたものに等しいとされる。彼の仮定によれば、 $K_t$  は生産的労働部門、すなわち、穀物生産部門の賃金基金とされるので、生産的労働の実質賃金率を  $w$  とすると、その部門の雇用労働量は  $K_t/w$  と表わされる。そうして、それに労働の生産性  $p$  を乗じたものが、その期の穀物の収穫量  $X_t$  に等しくなくてはならない。以上の関係を方程式で表わすと

$$X_t = \frac{p}{w} K_t = \frac{p}{w} k X_{t-1}$$

となる。それゆえ、経済成長率は

$$\frac{X_t - X_{t-1}}{X_t} = \frac{p}{w} k - 1$$

と表わされる。

---

(37) *Ibid.*, p. 32.



これがヒックスの言う「原モデル」であるが、それを提示した後、彼の議論は §3 へ進む。その節の冒頭のパラグラフで彼は次のように述べる。

(11) 「明らかに、これがスミスの伝えたいと望んだメッセージであり、そうして、それは原モデルの中で完全に明瞭なものになっている。しかし、スミスはこの原モデルに満足しなかった。彼の生産的労働は農業に限定されるべきものではなかったのである。そのことは、2種類の困難を生み出す。第1に、資本（および生産物）は、もはや、同質のものでなくなる。第2に、この原モデルにおいて単位期間を自足的（self-contained）なものにさせているところの、農業の自然的期間を失うのである。<sup>(38)</sup>」

これは、明らかにヒックスがイギリス古典派経済学をオーストリア学派の資本理論の視点から再構成しようと意図していることを示している。しかしながら、『国富論』の陳述のありようから、スミスがそのような解釈を許すような仕方で問題を考えていたとは、われわれにはとうてい思われないのである。スミスにとっては、ストック（stock）と生産物（produce）は初めから異質な諸商品の集合体であったのであり、そうして、やがて述べるように、彼が生産過程の時間的構造を意識してはじめて可能な理論を持っていたことは事実であるけれども、それを複雑化して論じようとする方向を目指してはいなかったと考えられる。

われわれには、ヒックスの §3 における議論の詳細を紹介する余裕はないけれども、彼がそこで述べている結論的な二つの論点には触れておかななくてはならない。その一つは、パラグラフ (16) の中で、資本と産出量の評価においてスミスが、事実上、「労働価値説」(a labour theory of value) に立っていると断定されていることである。すでに述べたように、『国富論』の中で述べられている「労働価値説」は、「ストックの蓄積と土地の占有に先立つ（すなわち、利潤と地代の存在しない）初期未開状態の社会」という虚構の中でしか成立しえない理論であって、彼の《商業的社会》に適用されることはけっして意図されていないのであった。それは、所得が賃金、利潤、および地代に分離する《商業的社会》の特性を際立たせるためのレトリックとして述べられているの

(38) *Ibid.*, pp. 31-32.

(39) *Ibid.*, p. 32, および, p. 33 n.5 を見よ。

であり、スミスのヴィジョンの表現の本質的部分ではないのである。

いま一つの点は、スミスのモデルにおいて資本と産出量を生産費で評価するさいに、その生産費に含まれるべき共通の利潤率がどのようにして決定されるかという問題をヒックスが提起していることである。その問題を解決するためには、スミスのモデルの中に、きわめて静学的な長期的均衡 (very static long-run equilibrium)<sup>(40)</sup> が成立しなくてはならないとして、ヒックスは §4 の議論に進むのである。しかしながら、そこで行なわれるヒックスの議論は、『国富論』の陳述に則して、とりわけ、その第 I 編第 IX 章「ストックの利潤について」の陳述に根拠づけられながら、行なわれることがないのである。そのような方法によって、「スミス自身のモデル」を示すことができるとは、われわれにはとうてい期待することができない。ヒックスが §1 の冒頭で、ほとんどもっぱら第 II 編第 III 章「資本の蓄積について、あるいは、生産的および不生産的労働について」にかかわると述べたことの真意は、第 I 編第 IX 章の陳述を無視することにあつたのであろうか。

ヒックスの §2 から §4 にわたる議論の注目すべき特徴の一つは、その中で彼のいう「スミス自身のモデル」が明示されていないことである。くりかえし言うと、彼が明示している「スミスの原モデル」は「スミス自身のモデル」ではない。この事実は、彼の『動学的経済学の方法』の第 1 章の劈頭において表明された彼の「方法」の概念に照らして、重大な不都合である。彼は、「方法」を「モデルの族、あるいは類」(a family, or class of models) と定義しているのであるから、「スミス自身のモデル」を明示しないかぎり、「スミスの方法」の特徴は明らかにならないであろう。もしも彼が「原モデル」を一つの虚構とするレトリックにうったえて「スミス自身のモデル」を間接的に表現しようとするのであるなら、それは身勝手というものであろう。そのような表現法は、スミスが『国富論』において採っている方法であるが、ヒックスはスミスの「ありのままの描写」、あるいは「写実的な陳述」を切り捨てることによって、その方法を否定しているからである。彼が第 1 章で表明した立場に立つためには、「スミス自身のモデル」なるものを「公式的なモデル」(formal

---

(40) *Ibid.*, p. 34.

models) として提示しなくてはならないのである。

## V

スミスのモデルを論じる §4 から、リカードのモデルを取り上げる §5 へと移行するために述べられているヒックスの議論は、一見したところ、つじつまが合っているかのように思われるかもしれない。彼の述べるところによれば、スミスの原モデルの示すところをつきつめると、資本蓄積の進行はやがて労働力不足を生ぜしめることになり、その結果として生じる賃金率の上昇が利潤率を低下させて、窮極的には、蓄積の進行が停止して、停滞的状态 (a stationary state) に到達するであろう。スミスは進歩的状态 (a progressive state) を特徴とする《商業的社会》の解明を志向しているのであるから、停滞的状态に向かう方向を回避するための論理が導入されなくてはならない。そうして、『国富論』の最初の諸章に述べられている「労働の分割」(division of labour) の議論がそれを可能にするとヒックスは言うのである。すなわち、労働の分割の進行は、原モデルのパラメーターの  $w$  のみならず、 $p$  をも上昇させるというわけである。ヒックス自身の言葉を使えば、「収穫逓増が救助にやってくるのであった」(Increasing returns would come to the rescue.<sup>(41)</sup>)。それに対して、リカードが「スミスのモデルを修正しようとしたであろうところの最初の道は農業に収穫逓減を導入することによるのであった」(The first way in which he will have wanted to modify the Smith model was by the introduction of diminishing returns in agriculture<sup>(42)</sup>) から、その点を見ることから始めようというのである。ここで、ヒックスが「スミスのモデル」と言うとき、それが「スミスの原モデル」を指すのか、あるいは、「スミス自身のモデル」なるものを指すのかは、かならずしも明瞭ではないけれども、彼の議論の全体から推して、それを「原モデル」と受け取っても格別の不都合は生じないように思われるので、われわれはそのように受け取って話を進めることにしよう。

(41) *Ibid.*, p. 35.

(42) *Ibid.*, p. 36.

さて、ヒックスの §4 の最初のパラグラフ (20) と (21) の陳述を見ると、彼が「原モデル」を構築するさいに、

$$X_i = p \left( \frac{K_i}{w} \right)$$

と置いたとき、彼が労働の生産性の係数  $p$  を一応、定数とした背後には、あらゆる部門の生産が規模にかんする収穫不変 (constant returns to scale) <sup>(43)</sup> の条件のもとに行なわれると仮定し、そうして、その結果として、すべての価格が一定不変のまま各生産部門が一定の割合で成長する着実な成長の状態 (a steady state) を想定できるモデルと接続できる可能性を残しておくことが配慮されているように思われる。他方、「スミス自身のモデル」について示唆される進歩的状态において、係数  $p$  の値は固定されず、労働の分割の進行にともなって、 $p$  の値が上昇するという形で、「収穫逡増が救助にやってくる」ことのできる余地が残されているのである。そうして、リカードの場合には、係数  $p$  が低下するという形で原モデルとの接続が可能になるのである。

こうして、ヒックスの構築した「原モデル」を基準にして、スミスの立場とリカードのそれは対照的な位置を与えられる。ヒックスのこのような解釈は非常にわかりやすいであろう。しかし、ある説明がわかりやすいということは、その説明が真実に近いことを保証するものではない。

ヒックスが、「規模にかんする収穫不変」、「収穫逡増」、あるいは、「収穫逡減」という言葉を使うとき、それらは「生産関数」の概念と不可分の結びつきを有するものであることに疑問の余地はない。限界生産力説の強い影響力のもとで育っているわれわれにとって、「生産関数」は、現実の技術的条件を表現するものとして、ともすると、経済学の状況とは関係なく、普遍的に適用可能な概念であるかのように受け取られがちである。また、それゆえにこそ、1930年代の初頭に LSE の「ロビンズ・サークル」の中で行なわれた、リカードの利潤の理論を「生産関数」の適用によって再構築するという試みが、末永く今日に至るまで受け継がれてきているのであろうとも考えられる。しかしながら、スミスやリカードの作品を直接に研究してみるならば、「生産関数」という概念がすぐれて新古典派的概念であって、それにはスミスやリカードの思考

(43) *Ibid.*, p. 34.

方式とはなじまない部分が含まれていることが感じ取られるであろう。

たとえば、『国富論』の劈頭に置かれる四つの章は、貨幣を媒介とする広範かつ複雑な交換体系としての《商業的社会》が、人間に固有の「交換性向」を動力として、「労働の分割」と「業種の分離」による活動方式の変容を通じて形成されてきたという歴史物語の形式で、スミスの壮大なヴィジョンの素描を提示しているのである。そのような議論を、「生産関数」の一つの属性としての「収穫逦増」の仮定の正当化のためのものと解釈することは、スミスのヴィジョンを矮小化する所業と言わねばならない。リカードの場合に、「収穫逦減」という言葉で指示されなくてはならない事柄が、ヒックスの意味しているものとは、かならずしもうまく重なり合うものではないことは、やがて以下で示すであろう。それに先立って、リカードのモデルにかんするヒックスの見解を見ることにしよう。

## VI

ヒックスは §5 において次のように述べる。

(28) 「その（農業に収穫逦減を導入した）結果として得られるモデルに二つの型があるのは、われわれにとって好都合である。第1のモデルは、1815年の『エッセイ』<sup>(44)</sup>の中で与えられていて、それはスミスから直接に引き継がれたものである。そうして、それは明らかに、その2年後に初版が刊行される『原理』<sup>(45)</sup>において精密に仕上げられることになるところのものの最初の素描なのである。問題の核心は『エッセイ』の中にある。そこで、『エッセイ』のほうを先に取り上げるなら、『原理』の関連部分を理解することがいっそう容易にな

(44) David Ricardo, *An Essay on the Influence of Low Price of Corn on the Profits of Stock* (London: John Murray, 1815), reprinted in *The Works and Correspondence of David Ricardo*, edited by Piero Sraffa, Vol. IV: Pamphlets and Papers 1815-1823 (London: Cambridge University Press, 1952), pp. 1-41.

(45) David Ricardo, *On the Principles of Political Economy and Taxation* (London: John Murray, 1st ed., 1817; 2nd ed., 1819; 3rd ed., 1821), reprinted in *The Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol. I (London: Cambridge University Press, 1952).

るであらう。<sup>(46)</sup>」

(29) 「『エッセイ』型のモデルには、その後の型のモデルで取り除かれる単純化のための仮定が置かれている。第1に、彼の目的は、たとえ労働力不足が起こらないとしても、土地の制約の効果が現われることを示すところにあるので、彼は次のように仮定するのである。すなわち、労働力不足は存在せず、そうして、その結果として、固定された実質賃金のもとで拡張は継続できると。……第2に、再び論点を鮮明にするために、彼は、労働者が農業生産物、すなわち「穀物」以外にはいかなる生産物も消費することがないと仮定するのである。<sup>(47)</sup>」

(30) 「『エッセイ』型のモデルから『原理』型のそれへの移行は、これらの単純化のための仮定を取り除くことを通して行なわれるのである。しかし、それを論じる前に、それらの仮定がどんなに強力な単純化をもたらすものであるかを見ておくことにしよう。それらの一番の帰結は、リカードをして農業部門だけを切り離して取り扱うことを可能ならしめたことである。経済の残余の諸部門で起こることは、農業で起こることに影響を与えないのである。それゆえ、彼は残余の部門を跳び越えて、(農業部門の中だけで)自足的な単位期間としての農業年を有するスミスの原モデル (the Original Smithian Model) に立ち帰ることができるのである。資本は、原モデルの場合と同じように、流動資本であり、そうして、それは前年の穀物産出量である。彼は、その自足的な期間中に農業部門で起こるところのものに注意を集中することができるのである。<sup>(48)</sup>」

(31) 「このような基盤の上に構築されるモデルは、『エッセイ』の中に、リカードの手になる算術表 (an arithmetical table) の形で表示されているが、それはきわめて難解な表であり、それほど容易に理解できるものではない。しかしながら、その本質的な内容は、もっと現代的な方式によって、(第1図の) 図式で表現することができるのである。<sup>(49)</sup>」

(46) Hicks, *Methods of Dynamic Economics*, p. 36.

(47) *Ibid.*

(48) *Ibid.*

(49) *Ibid.*

われわれは、やがて、リカードの『エッセイ』の算術表の構造を忠実に示すとともに、その表が『エッセイ』全体で述べられている彼の利潤の理論の中で演じる役割を明らかにするであろう。そのとき、ヒックスがパラグラフ (29) で述べているような単純化のための仮定をリカードはけっして置いていないことが明らかになるであろう。そうして、リカードが算術表の中に導入する「収穫逡減」の条件は、ヒックスのそれとは異なるものであることも明らかになるであろう。

また、ヒックスがパラグラフ (31) で、リカードの算術表について述べていることを、筆者は公正な評言とは思わない。§5 に掲げられているヒックスの第1図<sup>(50)</sup>を理解しようとする者に要求される程度の認耐力がありさえすれば、リカードの算術表はきわめて明快に理解できる単純な構造を持っているのである。そのように単純なものを、ヒックスの第1図の根底にあるモデルで表現し直すということは、たんに二重の手間を意味するにとどまらず、リカードの論理をそれとはまったく異質な論理にすりかえる所業であることが明らかになるであろう。それらのことを示すに先立って、まず、リカードの第1図の構造を、われわれは方程式によって表現しておくことにしよう。というのは、スミスの原モデルが方程式で示されているので、そのほうが『エッセイ』型モデルを原モデルに接続して考えるうえで便利であるからである。

ヒックスが第1図によって示しているリカードの『エッセイ』型モデルの基本的構造は次のような5本の方程式で表現することができる。

$$W = wN \dots \dots \dots (1)$$

$$K = W \dots \dots \dots (2)$$

$$r = \frac{f'(N) - w}{w} \dots \dots \dots (3)$$

$$x = f(N) \dots \dots \dots (4)$$

ただし、 $f'(N) > 0$ , かつ  $f''(N) < 0$

$$R = X - (rK + wN) \dots \dots \dots (5)$$

ここで、記号  $w$ ,  $K$ , および  $X$  は、前述のスミスの原モデルと同じく、農業部門の賃金率、資本ストック、および、当期の穀物の収穫量（産出量）であっ

(50) *Ibid.*, p. 37.

て、それらはすべて穀物の量である。さらに、記号 $W$ ,  $N$ , および $r$ は、賃金基金、労働の当期雇用量、および、利潤率である。方程式(1)と(2)は、かなり硬直的に解釈された賃金基金説を表わすものと受け取ることができる。すなわち、方程式(2)は、農業部門の資本ストックはすべて賃金基金(流動資本)からなることを示し、そうして、方程式(1)は、その賃金基金が当期の賃金支払総額をまかなうことを示している。

方程式(3)の意味は、もう少し先で述べるが、とりあえず、それは利潤率の定義式と受け取ることができよう。すなわち、農業者が最後の投資を、すなわち、労働の限界単位に対する前払い $w$ をするにあたって、その限界単位の労働が追加する余剰分 $f'(N) - w$ がその前払いの何パーセントにあたるかという比率が利潤率 $r$ として定義されていると受け取っておこう。

方程式(4)は労働の雇用量 $N$ と穀物の収穫量 $X$ を直接に結びつける生産関数であり、その二次の導関数が負値をとるべきことという条件によって、ヒックスのいう「収穫逓減」が表現されるのである。

以上の4本の方程式(1)~(4)は、本稿の初めに掲げたヒックスの覚書「リカード体系：コメント」で取り上げられているカルロ・カサローサの論文「リカード体系の新しい定式化」の方程式と同じものである。<sup>(51)</sup>そうして、やはりわれわれが本稿の初めにその存在を紹介したエデルバーグの論文「リカードの利潤の理論」に述べられているモデルも、事実上、これらの方程式で表わされ<sup>(52)</sup>ると考えることができる。

ところで、このカサローサの生産関数(4)と、スミスのもとの原モデルで用いられていた記号との間の対応関係は次のようになるものと解釈することができるであろう。いま簡略化の方便として、原モデルにおいて $k=1$ として考える(添え字 $t$ も省略する)と、

$$X = p \frac{K}{w} = pN$$

(51) Carlo Casarosa, 'A New Formulation of the Ricardian System', *Oxford Economic Papers*, New Series, Vol. 30, No. 1 (March, 1978), pp. 38-63. 問題の方程式は pp. 43-44 にある。

(52) Edelberg, *op. cit.* 彼が方程式(3)に対応する考えを持っていることは、その論文の脚注(p. 58 n. 19)の陳述から明らかであろう。



いま、係数  $p$  が雇用水準  $N$  にともなって変化する可能性を顧慮して、

$$p = g(N)$$

と表現すると、上式とカサローサの生産関数 (4) とを対応させて

$$f(N) = g(N) \cdot N$$

と置くことができる。両者の導関数については、

$$f'(N) = g(N) + g'(N) \cdot N$$

および、

$$f''(N) = 2g'(N) + g''(N) \cdot N$$

の対応関係が成立しなければならない。

すでに紹介したように、ヒックスは原モデルについて「規模にかんする収穫不変」というときには、 $p$  を定数、すなわち

$$g'(N) = 0,$$

であると考え、そうして、「スミス自身のモデル」について「収穫逦増」をいうときには、事実上、

$$g'(N) > 0,$$

また、リカードのモデルについて「収穫逦減」をいうときには、

$$g'(N) < 0,$$

であると考えているのである。

いま、上掲の対応関係において、符号の問題については  $g''(N)$  を無視することができるほどにその絶対値が小さいものと想定するならば、カサローサの生産関数における「収穫逦減」の条件

$$f''(N) < 0$$

と、ヒックスがいうリカードの「収穫逦減」の条件

$$g'(N) < 0$$

は同じことになるであろう。それゆえに、われわれは、このかぎりにおいて、スミスの原モデルとリカードの『エッセイ』型モデルを接続させて考えることができるのである。

ところで、リカードの『エッセイ』における利潤の理論では、利潤一般の決定において農業利潤が特異な役割を演じるうえに、その農業利潤の決定は地代の決定と密接不可分な関係におかれている。それゆえ、われわれは以上の4本

の方程式に加えて、地代総額  $R$  の決定にかんする方程式 (5) を導入する必要がある。すなわち、当期の穀物収穫量  $X$  から、利潤と賃金とに分配される部分  $rK + wN$  を差し引いた残余部分が地代  $R$  となるのである。そうすると、リカードに従えば、限界地、すなわち、労働の限界単位が投入される土地の地代はゼロでなくてはならないので、われわれはその条件を

$$\begin{aligned} \frac{dR}{dN} &= \frac{d}{dN} \{X - (rK + wN)\} \\ &= \frac{d}{dN} \{f(N) - (1+r)wN\} = 0 \end{aligned}$$

と表現することができる。この形式は、言うまでもなく、地代  $R$  を極大にする労働の雇用水準  $N$  を求めよという極大問題の解法になっている。この条件は、また、

$$w = \frac{f'(N)}{1+r} \dots\dots\dots (3')$$

と書くことができ、それが上掲の方程式 (3) と同じものであることは、一見して明らかであろう。こうして、農業利潤率の定義式 (3) は、地代の極大条件を意味することがわかった。それを上式 (3') の形で表現すると、 $r$  に別の意味を見出すことができ、有益である。すなわち、それは、当期期首に前払いされる賃金率  $w$  が、その期末にもたらされるであろうと予想される収穫量への追加分  $f'(N)$  を  $r$  で割引いた現在価値に等しいことを表わしていて、農業利潤率が割引率の役割を演じていることを、われわれに教えてくれるのである。

さて、以上の 5 本の方程式から成る体系の中に 7 個の変数  $W, w, N, r, K, X$ , および  $R$  が含まれていることに注目しよう。いま、説明を簡明にするために、この体系から方程式 (4) と (5) を除くと、それに伴って、2 個の変数  $X$  と  $R$  が取り除かれる。さらに、方程式 (1) と (2) から変数  $W$  を消去すると、それらは 1 本の方程式

$$K = wN \dots\dots\dots (1')$$

に帰着させられる。このようにして残される 2 本の方程式 (1') および (3) から成る部分体系の中には、4 個の変数  $w, N, r$ , および  $K$  が含まれている。

スミスのもとのモデルでは、前年の収穫量  $X_{t-1}$  によって、当期期首の資本ストック  $K_t$  が規定されるのであったから、リカードの『エッセイ』型モデルにおいて当期の均衡を考えるさいに、期首資本ストック  $K$  の値を所与と看做すことは、このモデルを原モデルに接続するうえで好都合であろう。それゆえに、われわれは  $K$  を所与としよう。そうすると、残る 3 個の変数  $w$ ,  $N$ , および  $r$  を 2 本の方程式 (1') と (3) で決定するという形になって、この体系は変数 1 個分の自由度を有することになる。しかしながら、ヒックスは §5 のパラグラフ (29) において、リカードの『エッセイ』型モデルでは、蓄積過程において労働力不足が起こることはなく、その結果として、実質賃金率は固定されていると仮定されていると述べていたのである。ヒックスのこのような解釈を受け容れるならば、われわれは、実質賃金率  $w$  を所与として、残る 2 個の変数  $N$  と  $r$  がこの体系によって決定されるべき変数であると考えることができるであろう。

以上の結果を、5 本の方程式の体系に戻して述べるならば、その体系が含む 7 個の変数のうち、 $K$  と  $w$  の 2 個が外生変数で、残りの 5 個の変数  $w$ ,  $N$ ,  $r$ ,  $X$ , および  $R$  が内生変数ということになる。

さて、このようにして、すべての変数が決定される時、方程式 (5) を次のように書き直して見よう。

$$X = R + rK + wN \dots \dots \dots (5')$$

ヒックスの §5 の第 1 図に描かれている長方形  $OHPN$  の面積は、当期の穀物の収穫量  $X$  に対応するように工夫されてある<sup>(53)</sup>。そうして、その長方形は、三角形  $HBP$ , 台形  $BARP$ , および、台形  $OARN$  に 3 分されているが、それらの面積は方程式 (5') の右辺の各項の大きさに対応しているのである。すなわち、三角形  $HBP$  の面積は地代  $R$  の大きさに、そうして、台形  $BARP$  のそれは利潤総額  $rK$  に、また、台形  $OARN$  は賃金支払総額  $wN$  に対応するのである。ヒックスは、農業部門の資本がすべて賃金基金から成ると仮定しているので、台形  $OARN$  は資本ストックの大きさに等しい。それは流動資本であるので、定義によって、1 年毎に全量が置き換えられなければならない。

(53) 以下の議論については、Hicks, *op. cit.*, p. 37 の第 1 図を参照せよ。

それゆえ、ヒックスはパラグラフ (32) において、台形  $OARN$  について、「それは資本の補填分である」(which is replacement of capital)<sup>(54)</sup> と述べるのである。彼は、さらに、パラグラフ (33) において、(たとえば、農業ストック  $K$  の増大の帰結として) 労働の雇用量  $N$  が増加するならば、それに伴って、利潤率  $r$  が低下すると同時に、地代  $R$  が増加するであろうことを、彼の図に基づいて説明する。

ヒックスは、また、パラグラフ (34) において、農業技術の改良が資本・産出量比率を低下させるとき、利潤率が上昇することを示している。この議論を上掲のモデルで行なうためには、生産関数 (4) の中にシフト・パラメーターを導入する必要があるであろう。ヒックスは、リカードの『エッセイ』型モデルについて比較静学を行なうことによって、そのモデルがリカードの『エッセイ』の中で述べられている理論と同じ結論を生み出すかのような印象を与えようとしているのである。

## VII

次に、リカードの『原理』型モデルなるものを見ることにしよう。ヒックスは、§6 において、『エッセイ』型モデルで置かれていた二つの仮定を取り除くことによって、それに到達するという説明のしかたを採っている。彼の述べるところによると、第1の仮定、すなわち、実質賃金率を固定するための仮定を取り除いても、それほど大きな面倒は起こらない。それゆえ、彼の説明の重点は、第2の仮定、すなわち、労働者は穀物以外の商品を消費しないとする仮定を取り除くことに伴って生じる問題に置かれるのである。彼の説明によると、この仮定を取り除くならば、農業部門を他の諸部門から切り離して取り扱うことができなくなる。その結果として、リカードは労働価値説を援用して問題を処理することになったというのである。ヒックスはこう述べている。

(39) 「もしもそれ(リカードが労働価値説にコミットしているということが認められるならば、『エッセイ』のモデルは容易に完結させられる。上掲の第1図におけるように、農業における利潤率 (the rate of profit in

(54) *Ibid.*, p. 38.

agriculture) は、穀物の尺度で表示される率 (a rate expressed in terms of corn) であるが、それは農業の限界点において (at the agricultural margin) 決定される。それと同じ利潤率 (しかも穀物表示の) が外部生産 (outside production, すなわち、農業以外の生産) にも適用されなくてはならない。外部賃金 (outside wages) もまた穀物の尺度で固定されている。それゆえ、均衡において、利潤率の一様性 (uniformity of the profit rate) によって決定されるところのものは、穀物の尺度で表示される外部生産物の価格なのである。このモデルでは、一貫して、穀物が価値の標準とされている。<sup>(55)</sup>

(40) 「賃金財 (wage-good) に穀物以外のものが含まれること、(すなわち) 外部生産物の一部が含まれることを一度承認するならば、『エッセイ』モデルのこのような性質は放棄されなければならなかった。彼はそれに代わる標準を探し求めなくてはならなかったのである。現代の経済学者なら、穀物の代わりに、複合賃金財 (a composite wage-good), すなわち、諸商品のバスケットを考えようとするところであろう。しかし、そのような着想はリカードの頭に浮かぶことがなかったのである。彼は、ある特定の標準 (a particular standard)<sup>(56)</sup> を見つけ出すことを欲していたのである。」

(41) 「異なる生産部門の間の時間構造が一様であるという彼の《労働価値説》の仮定 (his 'Labour Theory of Value' assumption) を保持することができたかぎりにおいて、その解決は明白であるように思われたのである。というのは、異なる諸生産物の価値は、その場合には、賃金あるいは利潤にどのような変化が起ころうとも、まったく同じ仕方で変化するのである。そうして、それゆえに、外部生産物の相対的価値は変化することがないからである。その場合には、それらの生産物のどれを標準としてもよいであろう。彼の思索のある段階において、リカードがこのように考えていたことは、十分に明らかである。というのは、その結果が単純な型の『原理』モデル (the Simple form of the *Principles* model) となったのであって、それは、それ以上の精密化が格別に問題にならないときに、リカードがしばしば使用して満足していた形

(55) *Ibid.*, p. 40.

(56) *Ibid.*

式であるからである。<sup>(57)</sup>」

(42) 「外部商品のどれを標準と看做すにしても、その標準で表示される他の諸商品の（均衡）価格は、このようにして固定されると考えられるのである。賃金もまた、その標準で固定されるとするならば、利潤率もまた、その標準で固定されるであろう。<sup>[16]</sup> 穀物生産においても同じ利潤率が支配するのでなくてはならないが、しかし、外部商品の労働費用が産出量から独立である（トリカードは想定している）のに対して、穀物のそれは、産出量の増大とともに、限界地において、上昇するのである。それゆえに、その標準で表示される穀物の価格は、産出量の増大につれて、上昇しなくてはならない。<sup>[17] (58)</sup>」

パラグラフ (39) でヒックスの言う「利潤率」が上掲の『エッセイ』型モデルにおける利潤率  $r$  と同じものでなくてはならないことに、ほとんど疑いの余地はないと思われるけれども、そうであるとするならば、その「利潤率」が「穀物の尺度で表示される率」であるというヒックスの陳述は奇怪である。たとえば、上掲の方程式 (5') において、その両辺の各項の値、とりわけ、 $rK$  と  $wN$  の項の値が、穀物の量で表示されていることは明らかである。そこで、 $N$  は労働時間であり、そうして、 $w$  は単位時間当たりの賃金を穀物の量で表示したものであるから、両者の積である賃金総額  $wN$  は穀物の量で表示される値になるのである。しかし、資本ストック  $K$  は、それ自体が穀物の量で表示される値であるので、利潤総額  $rK$  が穀物の量で表示される値であるとするれば、利潤率  $r$  は無名数 (a pure number) でなくてはならない。じっさい、ヒックスの第 1 図において、利潤率は、点  $R$  によって 2 分される線分  $PRN$  上に定義される比率  $PR/RN$  で表示されるのであるから、それは無名数である。<sup>(59)</sup> こうして、リカードの『エッセイ』型モデルにおいて、賃金率  $w$  はヒックスの言うように「穀物の尺度で表示されている」けれども、利潤率  $r$  がそうになっているはずはない。パラグラフ (39) におけるヒックスの陳述は、このような点を含んで、不可解であるけれども、そこに述べられている二つの論点、すなわ

(57) *Ibid.*

(58) *Ibid.*, pp. 40-41.

(59) パラグラフ (32) の冒頭部, *ibid.*, p. 37 を見よ。

ち、『エッセイ』型モデルでは、一貫して、穀物が価値の標準とされるべきこと、そして、均衡においては、すべての部門に一律な利潤率が成立すべきことは、一応、了解することができるであろう。

パラグラフ (39) における意味不明な論点は、そのままパラグラフ (40) の陳述の中に受け継がれているように思われる。確信の持てないままにあえて言うと、このパラグラフの要点は、『エッセイ』型モデルの第2の仮定、すなわち、労働者は穀物以外の商品を消費しないという仮定を取り払うならば、パラグラフ (39) に述べられているような『エッセイ』型モデルの特性は維持できなくなると主張するところにあるように思われる。しかしながら、賃金、利潤、および地代の自然率とともに諸商品の価値が決定される論理的構造がいかなるものであるかということと、そのようにして決定される諸価値を表現するための標準を何にするかということは、相互に独立の問題であろう。かりに、ヒックスがパラグラフ (40) で示唆しているように、穀物の代わりに、外部諸商品を含む「複合賃金財」を価値の標準としたところで、リカードの理論の基本的構造が変化するものでもあるまい。

このような意味不明の部分を含みながらも、ヒックスの議論の結末は、パラグラフ (41) と (42) に述べられている。すなわち、労働価値説の仮定を置くならば、『エッセイ』型モデルとして表現された農業部門は、その他の諸部門と接続されるというのである。彼は、そうして作成されるモデルを「単純な型の『原理』モデル」と名付けている。彼の言う「労働価値説」が何であり、それによってどのような形で農業部門とその他の諸部門との接続が行なわれるかについては、パラグラフ (42) の文章に彼が付した脚注〔16〕と〔17〕に手掛りが与えられている。彼の述べているところに若干の修正を加えて定式化すると、それは次のようになるであろう。

いま、穀物を価値の標準として表示される「外部商品」の実質価格を  $p_i$ , ( $i=1, 2, \dots, n$ ), そして実質賃金率を  $w$  とする。外部生産諸部門における労働投入係数、すなわち、その商品1単位当たりが必要とされる労働量を  $a_i$ , ( $i=1, 2, \dots, n$ ) とすると、 $wa_i$  は、その商品1単位当たりが必要とされる労働費用を穀物の量で表示した値になる。さらに、外部生産部門においても、資本はすべて賃金基金のみから成ると仮定すると、その労働費用に共通の

利潤率  $r$  を見込んだ生産費が自然価格でなくてはならない。すなわち、

$$p_i = wa_i(1+r) \dots\dots\dots (6)$$

同じことが、穀物の生産についても言えるから、

$$1 = wa_c(1+r) \dots\dots\dots (7)$$

もちろん、ここで  $a_c$  は穀物の生産における労働の投入係数である。

方程式 (6) と (7) から

$$p_i = \frac{a_i}{a_c} \dots\dots\dots (8)$$

が得られる。このように、商品の実質価格が、その商品の労働投入係数と、標準商品のそれとの比率として表現できることを、ヒックスは「リカードの労働価値説<sup>(60)</sup>」(Ricardo's 'labour theory') と呼び、そのような表現を可能にさせるところの諸仮定の集合体を「彼の<sup>(61)</sup>《労働価値説》の仮定」(his 'Labour Theory of Value' assumption<sup>(61)</sup>) というのである。

次に、方程式 (7) を書き直すと

$$w = \frac{\left(\frac{1}{a_c}\right)}{1+r}$$

という表現ができるが、その右辺の分子に含まれる穀物生産の労働投入係数について、ヒックスは、「 $a_c$  は産出量の増加関数である」( $a_c$  is an increasing function of output.<sup>(62)</sup>) と述べているので、われわれはそれを農業部門の労働雇用量  $N$  の増加関数と看做することができる。そこで、

$$\frac{1}{a_c} = \phi(N)$$

という形で関数  $\phi$  を定義すると、この関数は  $N$  の減少関数でなくてはならない。すなわち、

$$\phi'(N) < 0$$

である。この関数を方程式 (7) に代入すると

$$w = \frac{\phi(N)}{1+r}$$

(60) *Ibid.*, p. 40. n. 16.

(61) *Ibid.*, p. 40.

(62) *Ibid.*, p. 40. n. 16.



が得られる。この式をリカードの『エッセイ』型モデルの方程式（3）の変形（3'）と比較すると

$$\phi(N) = f'(N) > 0$$

$$\phi'(N) = f''(N) < 0$$

と看做すことができ、しかも、ヒックスが方程式（7）について想定している条件は、カサローサの生産関数（4）に付されている条件と整合的である。それゆえ、われわれはいわゆる「リカードの《労働価値説》」を表現する価格体系（6）および（7）を、『エッセイ』型モデルに接続することができるのである。こうして、ヒックスの言う「単純な型の『原理』モデル」は、方程式体系（1）～（5）に、価格体系（6）および（7）を接合したモデルであると受け取ることができるであろう。ヒックスは、結局、リカードの『原理』の基本的な理論構造に対して、これ以上に接近する「公式的モデル」を提示することがないのである。しかしながら、このような「単純な型の『原理』モデル」の特性からリカードの経済学の「方法」をほんとうに特徴づけることができるのであろうか。

## VIII

リカードの『エッセイ』の中に提示されている算術表の構造は、ヒックスが示唆するほどに難解なものではない。筆者はすでに別稿において、そのことを明らかにしているから、その詳細に興味のある読者にはそれを参照されるべきことを断わったうえで、本節ではその結果を要約的に紹介するにとどめる。その構造は、単純な数学的モデルとして十全に表現されるけれども、そのモデルは『エッセイ』全体で表現されているリカードの利潤の理論そのものではなく、きわめて間接的な仕方で彼の理論の一局面を示唆するものでしかない。それはリカードのレトリックの一部分にすぎないのである。リカードがそのモデルを『エッセイ』の議論の中でどのように使っているかを慎重に検討するなら

---

(63) 拙稿「賃金基金説の系譜について（5）」『経済学研究』（北海道大学）、第35巻、第2号（1985年9月）、pp. 147（323）—172（348）、および、それに続く論稿を見よ。

ば、たとえば、次に列挙するような事柄が明らかになるであろう。

(i) リカードは、その利潤の理論の中で、固定資本の存在を捨象してはいない。

(ii) リカードは、農業の生産物とストックが同質の穀物から成るという仮定を置いていない。

(iii) リカードがその算術表に導入している「収穫逓減」の条件は、「生産関数」の属性とは、かならずしも関係するとはかぎらない。

(iv) リカードは『エッセイ』において、実質賃金率を固定するための仮定を置いてはいない。

(v) リカードは、『エッセイ』において、労働者が穀物以外の商品消費しないという仮定を置いていない。

(vi) リカードは労働価値説を、『原理』ではじめて導入するのではなく、それは『エッセイ』の理論の中でも不可欠の役割を演じるのである。

これらの事実が、これまで紹介してきたヒックスの議論にとって致命的な証拠であることは言うまでもない。たとえば、(vi) の事実は、「リカードの『エッセイ』型モデル」に、「リカードの〈労働価値説〉」を含む価格方程式 (6) および (7) を接続させて「単純な型の『原理』モデル」が構築されるというヒックスの議論の筋書を無効にするであろう。また、この事実に (i) の事実を組み合わせると、前節に掲げた (8) 式で表現される「リカードの〈労働価値説〉」なるものは、表面的にそう見えるとしても、リカード自身の念頭にあった労働価値説とは似ても似つかぬ別物であることがわかる。リカードは、スミスと違って、労働価値説を、いわば〈商業的社会〉の理論として適用することを考えていたのである。そこでは、資本の分割 (Division of Capital) が進んで、資本は流動資本と固定資本とから成っているのでなくてはならない。

リカードの『エッセイ』および『原理』がスミスの『国富論』の基盤の上に築かれた作品であることを、ここで強調しておきたい。彼が『エッセイ』において、資本一般の利潤の分析を行なうとき、それを農業、製造業、および商業の各ストックの利潤に分けて考察するのは、スミスの流儀に従っているのである。また、そこで、価値の標準として、銀 (貨幣)、穀物、および労働のなかから穀物を採択しているのも、『国富論』第 I 編第 V 章「商品の実質価格と名

目価格について」<sup>(64)</sup>に述べられてある議論の線に沿っているのである。そうして、スミスによれば、資本とはストックのうち利潤を得るために営業的に使用される部分をいうのである。そこで、リカードの『エッセイ』の算術表に現われる資本は、ある一定の順序に従って農業に投下されるストックであるので、われわれはその投下の順番を正の整数  $t$  で表示することにしよう。一般に、第  $t$  番目に投下されるストックを実物面から見ると、それは種々雑多な商品の集合体である。それを価値の面から見ると、それは、まず、名目価値額として英貨ポンド、すなわち、銀の量で表示されるけれども、長期にわたる資本蓄積の過程では、貨幣の購買力は大幅に変動するから、この場合の価値の標準としては、銀よりもむしろ穀物のほうが適当であるとは、スミスの教えるところである。<sup>(65)</sup>そこで当期の穀物価格で第  $t$  番目に投下されるストックの名目価値額を割った量が  $C_t$  クォーターの小麦に相当するものと想定しよう。それは、第  $t$  番目に投下されるストックが均質の小麦  $C_t$  クォーターで構成されることを意味するのではけっしてなく、そのストックが  $C_t$  クォーターの小麦を購買ないし支配することのできる価値を有するということを意味するのである。

さて、リカードは『エッセイ』の算術表で  $C_t$  の系列を、初項200、そして項差10とする逓増的な等差数列で与えるのである。すなわち、

$$\begin{aligned} C_t &= 200 + 10(t-1) \\ &= 190 + 10t \end{aligned}$$

これらのストックを雇用することから生じる農業生産物の当期の余剰が、 $S_t$  クォーターの小麦に相当するものとしよう。もちろん、それは農業の生産物が均質な小麦だけから成ると仮定していることを意味するものではない。リカードは、スミスと同様、農業生産物を種々雑多な商品の集合体と考えているのである。余剰  $S_t$  とは、その集合体の価値からその生産に必要なとされる諸経費を差し引いた残額に相当する小麦の量なのである。ヒックスの作ったモデルの生産物  $X$  には賃金支払分  $wN$  が含まれているのに対して、リカードの  $S_t$  には賃

(64) Book I, Chapter V: Of the real and nominal Price of Commodities, or of their Price in Labour, and their Price in Money, Smith, *op. cit.*, pp. 32-48.

(65) *Ibid.*, p. 37.

金部分は含まれておらず、それが利潤と地代に分かれるのである。

リカードはその算術表において、 $S_t$  の系列を初項100、そして項差マイナス10とする逡減的な等差数列で与えている。すなわち、

$$\begin{aligned} S_t &= 100 - 10(t-1) \\ &= 110 - 10t \end{aligned}$$

ヒックスが「スミスの原モデル」に「収穫逡減」の条件を導入して「リカードの『エッセイ』型モデル」を作成する根拠は、リカードが上述のように  $C_t$  を逡増的な数列で与えるとともに、 $S_t$  を逡減的な数列で与えているという事実求められなければならないであろう。しかし、リカードがこのようにして与えている条件と、カサローサの生産関数(4)の第2次導関数が負の値をとらなくてはならないという条件との間には、無視することのできない相違がある。たとえば、ヒックスの意味において「収穫逡減」の条件が成立しない場合であっても、資本蓄積の進行する過程で労働力不足が起こり、その結果として実質賃金率  $w$  が上昇するならば、賃金支払額を控除した後に得られる  $S_t$  は減少するであろうから、リカードの条件は成立する可能性があるように思われる。他方、ヒックスの意味において「収穫逡減」の条件が成立しても、資本蓄積の速度が人口増加率よりも低い場合には、実質賃金率が低下して、 $S_t$  が増加することも十分に考えられるであろう。このような議論が可能になる背景には、『国富論』第I編第VIII章「労働の賃金について」に述べられている広い意味での賃金基金説が存在して、古典派の世界で賃金率の動向を論じる場合には、限界生産力説の命題の制約から自由でありうるという事情があるのである。以上の議論は、たんに「収穫逡減」の条件の問題点だけにとどまらず、リカードの『エッセイ』において実質賃金率が固定的には扱われていないことをも示している。

さて、リカードによれば、農業ストックの利潤率は、地代を生じない限界地に投下されるストックの利潤率  $\pi_m$  に等しくなる。限界地に投下されるストックの順番を  $m$  とすると、その利潤率はストック  $C_m$  に対する余剰  $S_m$  の比率であらわされる。すなわち、

$$\pi_m = \frac{S_m}{C_m} = \frac{11-m}{19+m}$$

したがって、第  $t$  番目に投下されるストック  $C_t$ , ( $t \leq m$ ) の利潤は

$$\pi_m C_t = 10(19+t) \frac{11-m}{19+m}$$

そうして、それが投下される土地の地代  $R_t$  は

$$\begin{aligned} R_t &= S_t - \pi_m C_t \\ &= 10(11-t) - 10(19+t) \frac{11-m}{19+m} \end{aligned}$$

である。リカードの『エッセイ』の算術表の最初のものには、以上の数値が  $m=1$  の場合から  $m=8$  の場合まで、巧妙に配列されている。<sup>(66)</sup>

しかし、リカードの窮極の目的は、資本蓄積の進行過程において、総余剰額

$$\sum_{t=1}^m S_t = 5m(21-m)$$

が、利潤と地代に分かれる分配率の動向を見ることにあるので、彼は算術表の最初のものに配列した数値を集計して、第2の表を作成するのである。その表の第1欄には、投下ストックの累積額

$$\sum_{t=1}^m C_t = 5m(39+m)$$

が、 $m=1$  から  $m=8$  の場合まで計上されている。さらに、利潤総額

$$\pi_m \sum_{t=1}^m C_t = 5m(39+m) \frac{11-m}{19+m}$$

および、地代総額

$$\begin{aligned} \sum_{t=1}^m R_t &= \sum_{t=1}^m S_t - \pi_m \sum_{t=1}^m C_t \\ &= \frac{150m(m-1)}{19+m} \end{aligned}$$

が、それぞれ、 $m=1$  から  $m=8$  の場合まで計上される。

まず、利潤総額の動向の基本的特徴は、その式の右辺の分子が  $m$  にかんする3次の多項式になっていることから容易に推察される。いま、 $m$  を実数の範囲にまで拡張し、それを横軸にとって、この3次式のグラフを考えると、 $m$  が  $-39$ ,  $0$ ,  $11$  の3点においてその曲線は横軸を切ることがわかる。われわれに興味のある範囲は、 $m$  が  $0$  から  $11$  に至る区間であるが、その区間で曲線は横軸

(66) Ricardo, *The Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol. IV, p. 17.

の水準からしだいに上昇し、その区間の中ほどで上昇から下降に転じて、最後に再び横軸の水準に戻るのである。じっさい、リカードの第2表の利潤総額の欄を見ると、それらの数値は  $m=5$  までは増大し続けているけれども、 $m=6$  以後は減少傾向を示している。リカードは、利潤総額のこのような動向に特別の注意を向けている。

他方、地代総額は  $m$  の増加につれてもっぱら増大し続け、ついに、 $m=11$  に至って

$$\sum_{i=1}^m R_i = \sum_{i=1}^m S_i$$

となることが、上式からわかる。すなわち、第11番目の投資が行なわれるとき、その限界地の余剰はゼロとなるから、農業ストックの利潤率はゼロでなくてはならず、その結果として、余剰のすべてが地代に吸収されるのである。

以上で、リカードの算術表の成り立ちは完全に表現されているが、それよりも重要な問題は、リカードがこのモデルを彼の利潤の理論全体の中でどのように使っているかを読み取ることである。それを詳細に論じる余裕はないので、一例として、算術表の説明文にリカードが付している脚注†を引用してみよう。彼はこう述べている。

「†この表の作成に用いられているデータは仮定のものであり、そうして、おそらく、それが真実のデータからは非常にかげ離れたものであることを述べておく必要はほとんどないであろう。それらは原理を説明する意図をもって与えられたのであるから——第1段階の利潤が50パーセントであろうが、あるいは5パーセントであろうが——あるいはまた、新しい土地の耕作から同一量の生産物を得るのに必要とされる追加的資本が10クォーターであろうが、あるいは100クォーターであろうが、同じことであるだろう。その土地に投下されている資本のうち、固定資本の部分がより小さくなるのに比例して、地代は増大し、そうして、(利潤)の減少する速度は遅くなるであろう。<sup>(67)</sup>」

われわれは、別稿において、この脚注の末尾に述べられている命題を証明し<sup>(68)</sup>

(67) *Ibid.*, p. 15n.

(68) 拙稿「賃金基金説の系譜について(6)」『経済学研究』(北海道大学), 第36巻, 第1号(1986年6月), pp. 73-106, のとりわけ, pp. 90-96 を見よ。

ているので、その詳細に興味のある読者は、それを参照されるとよい。ここでは、上に紹介したモデルをどのように使えば、その証明ができるかという方針を述べるにとどめたい。

いま、第  $t$  番目に投下される資本  $C_t$  を一定として、その中で固定資本として雇用される部分がより大きくなる状況を想定してみよう。当然、流動資本として雇用される部分は小さくなるであろう。具体的な例としては、耕作のための役牛（固定資本）を新規に買い入れた結果、人手を減らすことができるという状況を考えることができよう。その結果として、流動資本の構成項目である賃金基金が削減される。役牛の雇用に伴う流動資本の増加が賃金基金の減少を相殺しないかぎりにおいて、流動資本は減少するであろう。そうすると、 $C_t$  に対応する余剰  $S_t$  は増加する。生産物の売り上げの中で、賃金支払額が削減されるので、利潤と地代に回わされる余剰部分が増加するというわけである。こうして、リカードの算術表に与えられている  $S_t$  の系列を一様に上方にシフトさせるという形で比較静学を行なうことによって、上掲のリカードの命題を導出することができるのである。

リカードの算術表が、彼の『エッセイ』に述べられている資本の一般利潤率の理論の中で農業ストックの利潤率の決定にかんする部分のみを説明するものであることは、すでに明らかである。他の生産部門のストックの利潤率の動向を捉えるためには、穀物とその他の商品の価格の動向を分析する必要があるもので、彼が『エッセイ』の中で何らかの形の価値の理論を持たざるを得なかったであろうことは、容易に予想できるところである。そうして、彼がスミスと違って、労働価値説の立場をとったことは、次の一節からも明らかであろう。彼はこう述べているのである。

「あらゆる商品の交換価値は、それらの生産の困難さが増大するにつれて上昇する。そこで、もしも穀物の生産に新しい困難が起こるならば、金、銀、生地、リンネル製品等を生産するためには少しも多く労働が必要とされることがないのにたいして、穀物にはより多くの労働が必要になることから、穀物の交換価値は他の商品に比較して必然的に上昇するであろう。それとは反対に、穀物の、あるいは、その他のいかなる種類の商品の生産における容易さも、同量の生産物をより少ない労働で生み出すことを可能にするであろうから、その交

換価値を低下させるであろう。……競争がその効果を十全に発揮することができて、その商品の生産が、ワインの場合のように自然によって限定されるといったようなことがないところではどこであれ、それらの生産が困難であるか、あるいは容易であるかが、それらの交換価値を窮極において規制するであろう。そうして、農業における、あるいは、製造業における、あらゆる改良とは独立に、富の増進が単独で諸価格に及ぼす効果は、その他のあらゆる商品の価格を以前のままとどめながら、原生産物と労働の価格を上昇させるとともに、賃金の全般的上昇の帰結として、一般利潤率を低下させることであるように<sup>(69)</sup>に思われる。」

この陳述を見るだけでも、『エッセイ』を執筆していた段階のリカードが価値の理論にかんしては、アダム・スミスとはかなり異なる見解をとっていたことが明らかである。彼はその見解を『原理』でも保持し続けたのであるが、われわれの当面の問題については、『原理』の第 XXII 章「輸出に対する奨励金と輸入の禁止」<sup>(70)</sup>の中で、彼がスミスの見解を批判するさいに、「穀物以外には何物も労働者によって消費されない」という不当な仮定に立たないかぎり、スミスの議論は成立しないであろうと論じていることが興味を惹く。このような議論をするリカードが、どうしてこのような仮定に立って利潤の理論を組み立てることができたであろうか。<sup>(71)</sup>

## IX

以上の説明によって、ヒックスの構築した「素朴な成長モデル」がスミスとリカードの作品の実体からかけ離れたものであることは、すでに十分に明らかにされたであろう。蛇足ながら、いま一つ、ヒックスが「単純な型の『原理』モデル」に導入した価格方程式（6）との関連で、スミスの理論の中に含まれ

(69) Ricardo, *op. cit.*, pp. 19-20.

(70) Chapter XXII: Bounties on Exportation, and Prohibitions of Importation, in Ricardo's *Works*, Vol. I, pp. 301-320.

(71) この点の詳細については、拙稿「賃金基金説の系譜について（8）」、『経済学研究』（北海道大学）、第36巻、第3号（1986年12月）、pp. 137（357）—170（390）を見よ。



る興味深い命題を紹介したうえで、本稿を閉じることにしよう。

『国富論』第I編第IX章「ストックの利潤について」の末尾のパラグラフに<sup>(72)</sup>述べられている命題と、簡単な数値例による論証は、エドウィン・キャナンの不当な注釈にもかかわらず、彼の理論の特徴的な一局面を提示している。その詳細な説明は、<sup>(73)</sup>別稿で述べられているので、ここではその要点を略述するにとどめる。

いくつかの単純化の仮定を置くと、スミスは結局、次のような価格方程式で表現される論理を考えていることになる。すなわち、

$$p_1 = W(1+r),$$

$$p_i = (W + p_{i-1})(1+r), \quad i=2, 3, \dots, n$$

がそれであるが、これらの方程式は第 $(i-1)$ 段階の生産物が第 $i$ 段階の生産過程の原材料として使用されるという単線的な生産構造を表現している。もちろん、各段階の賃金費用 $W$ はすべて同じであるという仮定も置かれている。そうすると、第 $n$ 段階の生産物である最終商品の価格 $p_n$ は、

$$\begin{aligned} p_n &= W \{(1+r) + (1+r)^2 + \dots + (1+r)^n\} \\ &= W \frac{1+r}{r} \{(1+r)^n - 1\} \end{aligned}$$

という形になる。スミスの議論の要点は、賃金の上昇が商品の価格に及ぼす効果は比例的に（彼の言葉によれば、算術比的に）作用するのに対して、利潤率の上昇の効果は複利的に（彼の言葉によれば、幾何比的に）作用するということにある。それゆえ、業種の分離（separation of trade）が十分に進んでいる「商業的社会」では、利潤率の上昇の効果のほうが賃金の上昇よりも商品の価格を高めるうえで大きいことが、しばしばあるというのである。このような論理をスミスがはっきりと述べているとき、それよりもはるかに単純ではあるけれどもその論理の基本的要素となっている価格方程式（6）を、リカードの『原理』型モデルの特性として、スミスのモデルから排除するというヒックスの議論の筋書は不当というほかないであろう。

(72) Smith, *op. cit.*, pp. 99-100.

(73) 拙稿「賃金基金説の系譜について（13）」、『経済学研究』（北海道大学）、第37巻、第4号（1988年3月）。

1890年代以後の新しい経済理論の立場から古典派経済学の理論構造を矮小化して見るという LSE のグループに顕著な悪しき伝統の種子は、その多くがエドウィン・キャナンの手によって播かれたと思われる証拠は、この他にも多数挙げることができる。そうして、ヒックスの「古典派経済学」に対する視角も、キャナン以来の伝統の影響下で採られたものにほかならない。

他方、ヒックスが『動学的経済学の方法』の冒頭で表明している「方法」の概念は、「モデル」によって、直接的に、真実 (reality) を表現する方向を指示するもののように思われる。彼はその自伝的論稿「一経済学者の形成」において、現代の計量経済学を信じないという意志の表明を行なっているけれども<sup>(74)</sup>も、計量経済学は「モデル」によって直接的に真実 (reality) を表現する方向を志向するという点で、ヒックスの方法論に沿っているようにも思われる。それに対して、スミスとリカードの方法が、「モデル」をレトリックの手段として使用し、間接的に真実を表現しようとするものであることを、われわれは本稿でくり返えし強調してきたのである。

〔追記〕今川正先生は昭和31年4月に、香川大学経済学部の助教授として最初の財政学講義を開講された。当時、第3年次学生であった私は幸運にも、その席に加わることができたのである。御講義は、有料橋の通行料金の設定にかんするデュピュイの限界効用理論の紹介から始められ、マルクスの価値論になじむところの多かった一学生に新鮮な印象と強烈な刺戟を与えたのである。個人的な接触を得るための口実として、ケインズ『一般理論』の原書の序文と第1章だけを取り急ぎ読んで質問の種を仕込んだいつわり多い学生を高松市昭和町官舎の御自宅に快く迎え入れて下さった情景は、いまだにはっきりと私の脳裡に浮んでいる。その後、2年間にわたる J. C. C. Mckinsey, *Introduction to the Theory of Games* (New York, 192) の講読会を通じて数理経済学への手ほどきをして下さったこと、大学院入試準備のためのドイツ語の勉強会を特別に作って下さったことなど、書きつくすことのできない多大の学恩を負う者として、今回、この機会を与えられたことは無上の光栄であり、いまさらながら、途方もない幸運の想いを禁じることができない。

---

(74) Hicks, *Classics and Moderns*, p. 361.